
僕らの恋模様 ~恋って何?~

トムトム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕らの恋模様 ～恋って何？～

【Nコード】

N1744BA

【作者名】

トムトム

【あらすじ】

間違つて前作を短編小説にしてしまいました。実際には前作の続きです。

恋を知らないリョウはどんな恋をするんでしょう？

初恋以前1 (前書き)

恋ってどうしたらできるの？

初恋以前1

「おはよう。昨日も仲良かったわけだ」

昨日なかなか寝付けなかったのを両親の夫婦生活のせいに見てみた。

「何のこと？リョウ」

「お肌がツヤツヤですけど？ごまかすなよ。夫婦なんだからさ」

俺は当たり前のこととして気にもしないで言う。

「あははは…気をつけるね」

母さんは一応気にしているみたいだ。

「俺も高校生だし、二人で旅行に行ったら？」

今度の連休で行ってくれ。俺の間はリフレッシュする。

「本当？リョウ？でも今度の連休明けは締め切りがあるんだよね」
母さんはコーヒーをのんびりと飲んでいる。

「…詰まってるの？」

「平気よ。好きでやっている仕事だもの」

コーヒーをテーブルに残して、母さんはまたリビングの片隅のパソコンデスクについた。

母さんは、翻訳家と小説家だ。最初は翻訳をメインにしていたらしいが、

趣味で書いていた小説が編集者の目に留まって小説家デビューをした。

以来、ティーンズ小説を中心に活動をしている。

なので、子供は俺しかいないのに、本棚にはティーンズ小説やティーンズ雑誌が溢れてる。

俺は手早く朝食を食べて自分で片付ける。母さんの仕事もあって基本的に自分でできることは

自分でやることにしている。家庭科全般は無難にこなせるようになる

った。

いつでも、家庭科が苦手な彼女ができて俺ができるから大丈夫だ。で、今はお弁当用に卵焼きを焼いている。

「母さん、お昼はお弁当でもいいの？」

「そうしてくれると嬉しいなあ」

画面とにらめっこしている母さんののんびりとした声がする。

父さんと母さんは、初恋同士で結婚したと聞いている。

母さんに恋愛相談と称してくる学校の女の子には慣れ染めを教えているのに

俺には一切教えてくれない。

現役女子高生とガールストークで新作の構想を練るのに都合がいいんだって。

大手SNSでもやり取りをしているそうだ。

「じゃあ、今日の放課後は来てもらわないようにしたら？スーパーで欲しいものはメールして」

俺は自分の分と母さんの分の弁当を作って弁当袋に詰め込んだ。

「ありがとうね。リヨウ。…まだ初恋の君は現れない？」

「…まだだね。ねえ、恋つてするの？それとも…違うの？」

「それは…その人次第よ。気が付いたら恋だったりするし、落ちる事もあるし」

「そっか。じゃあ俺はその時を待ってればいい訳か」

「そう。リヨウはいい子なんだから、そのままでもいいのよ？分かる？」

パソコンに向かっていている母さんが俺を手でおいでと呼ぶ。

「ん？」

「私と裕貴の自慢の子なんだから。光源氏な訳ないでしょ」

「気にしてねえよ。そんなこと。じゃあ、行って来るよ」

俺は玄関を開けて外に出た。

家の前の交差点は赤信号を指している。青に変わるまで庭にいて
いか。
親って子供の悩みが分かるんだなあとちょっとだけ感心していた。

初恋以前1（後書き）

あらすじに書いた通りです。

他のシリーズのような展開には一切なりません。

初恋以前2

裏門からの登校は自転車通学者か、先生か裏門が近い生徒に限られる。

俺もそんな一人だ。そんなせいか、毎朝見る顔ぶれはほとんど同じといってもいい。

信号が赤い間は俺は庭で待つことが多い。信号は門の前だが、学校の生徒が多くて

通行する人の邪魔になってるなあとある時、考えたことがあってからだ。

以来、俺だけはそうしている。

「ちょっと、よそのお宅に何入り込んでいるのよ」

俺はいきなり腕を引かれて通りに出された。そこには俺より低い同じ制服を着た女の子がいた。

「えっ、何の事かな？ここは俺の家でもあるんだけど」

リビングのカーテンは開け放されていて、俺と女の子を見ている母がコーヒークップを持って

眺めていた。

「あそこにいるの、俺の母親。似てるだろう？」

俺は女の子に母さんを指さして言った。

「そうみたいね。ごめんなさい、私…知らなくて」

女の子は赤くなってうつつむいてしまった。恥ずかしいんだろうな、思い切り。

「今度会っても怒らないでくれよ」

俺は努めて彼女に言った。彼女の勘違いだから、そこまで謝って欲しくない。

ちっちゃい女の子が必死に謝れると、俺の方が悪く思われるんじゃない。

ね？

「はい、あなたの名前は？名字は田中君だよな」

彼女は門の表札を見て言った。そう、俺は田中諒という。

けれども、子供の頃から名字で呼ばれることはほとんどない。

諒と呼ばれることが多いんだけど、俺のイメージ的にはカタカナ表記なんだよな。

「そうだね、名前はリヨウ。皆もリヨウって呼ぶから君もリヨウって読んでいいよ」

「分かった。リヨウ君。はじめまして。私は山川りおと言います」

彼女は律儀に胸ポケットに入っている生徒手帳を見せてくれた。

「りおちゃんね。可愛い名前だね。川が二つ続いちやうから平仮名なのかな？」

確かポルトガル語だったよな。なんとなく俺は思い出していた。

「よく知っているんですね。初めてです。そうやって言われたの」
りおちゃん（さんつてイメージじゃないんだ。申し訳ないけど）は目をキラキラさせて

俺に言った。

「偶然だよ。信号変わったよ。行こうか」

そうして、俺とりおちゃんは裏門に入って行って別れた。

りおちゃんは友達と待ち合わせだったようだ。

りおちゃんは、8組と生徒手帳に書いてあったから1組な俺との接点はない。

だから俺の名前も知らなかったんだろう。知っていたらどういう反応をしたんだろう？

あれ？俺今までそんな事考えたことないや。なんでかなあ？
母さんが朝食の時にあんなことを聞いたせいで意識したんだろうな。
俺はそんなことを考えながら昇降口に向かって行った。

初恋以前2（後書き）

ちよこつとだけ、女の子を意識していますが、親に煽られたせいにしていきます。

本当のところはどつなんでしょう。

初恋以前3（前書き）

リヨウとりお目線を一気に書き込みます。

初恋以前3

side りお

「おはよう。さつき」

「りお、ちょっと見たわよ。大丈夫？」

自転車置き場で自転車を置いている同じクラスのさつきに私は近づいた。

「えっ、何が？」

「何がじゃないわよ。光源氏に何かされたの？」

「光源氏？私は田中諒くんと話をしたのよ」

「だから、それが光源氏なのよ。あんた知らないの？噂の話」
なんとなく、聞いたことがある噂を思い出す。

「ふうん、そうなんだ。噂の人とは知らなかった。普通の人だよ」

「でも、連れて歩く女の子がしょっちゅう変わるんだよ。それってどうなのよ」

「どうなのよって言われてもリヨウ君にはリヨウ君の事情があるでしょうっ？」

さつき、ちょっと話をしただけの男の子が噂の相手だと初めて知った。

皆がおもしろ可笑しく言っているのはなんか違うような気がする。もっと穏やかな、平凡だけでも、野に咲く花のような感じだ。

そこにいて当たり前なんだけども、いないとちよっと寂しいような。

「で、どんな話したのよ」

「私が勘違いしてリヨウ君を怒っちゃったの。それだけよ」

「りおはそそっかしいからね…やっちゃんなんだ…」

「うん、そうなのよ。恥ずかしかったわ」

「そういえば、今日は自転車は？」

「寝坊したから、バスで来たのよ」

そう、私は思い切り寝坊してしまって自転車だと遅刻になってしま
う所だった。

「じゃあ、帰りもバス？」

私は首を縦に下ろした。

「そう、じゃあバスの時間までは一緒にいてあげるね」

「ありがとうさつき。でも…勘違いした私をリヨウ君は怒らなかつ
たの」

「そう？彼にとってはそんなものな程度なんじゃない？彼の家って
近いんだ」

「うん、裏門の前の家だったの」

「羨ましいね、家が近いのだけは」

「そうだね」

私たちは教室に着いたので、これ以上彼の話を止めた。他のクラス
メートの

話の輪に加わった。

side リヨウ

「田中。おはよう」

「おはようございます。斉藤先生」

「ところで、裕貴は今日はいるか？」

「多分、早くはないでしょうけど。母ならいますよ」

「晴香ちゃんか…晴香ちゃんでもいいから行こうかな」

「言っておきますね。本当に斉藤先生って二人の同級生だったんだ」

斉藤先生は、両親と同級生。俺は親父達同窓生の中では一番早い子

供らしい。

「後で昔の写真見るか？こないだ橋本先生が見つけたらしいぞ」

「…橋本先生ですか：俺ちよつと苦手で…」

「ハハハ。別に校則破ってないだろう？大丈夫。先生、お前が入学した時

すげえ喜んでいたんだぜ。ここだけの話にしくれな」

「いいですよ。その位」

「お前、どうしてここにしたんだよ？お前の学力なら他もあつたら？」

「うーん、両親が3年間過ごした学校に行ってみたら分かるような気がしたんだけど」

「何が？」

「恋って何なのか」

俺がそう言つと斉藤先生はお腹を抱えて笑いだした。

「おつまえ、本当にあの夫婦の子か？学校では教えられないが、お前なら答えが

出ていると思つてたぞ」

「そう言われると俺も困るんですけど。分からないんですよ」
俺はほとほと困っている表情を浮かべた。

「そつか。悪かったな。でも、恋は落ちるものだと思うぜ。焦つてもいい答えは

出るとは限らないぜ」

「まあ、あの二人が高校卒業してすぐに入籍するとはな」

「記念日って卒業式だったんですか？」

「そつだよ。俺らの目の前で婚姻届書いて、校長先生と橋本先生にサイン貰つたはず」

「付き合つてたんですよね？あの二人」

今まで聞いたことない話だから、もつと話を聞きたい。

「付き合っていたけど…皆が知ったのがかなりたつてたからな」

「バカツプルじゃないんですか？」

「校内で手をつなくなんて…あの二人には罰ゲーム級だったからな」
俺は首を思い切り捻る。俺が知っている二人はいつでもくっついてる。

「まあ、いろいろあるんだよ。彼氏と彼女でも。夫婦でも…な」

そうなんだ。何かがあつたから今の二人な訳か。

「じゃあ、お前はまだ初恋以前なんだな。俺はお前の初恋も見れるんだ」

裕貴には教えてやらねえ。皆のアイドルを奪つたんだしな」

斉藤先生から聞きなれない言葉が出た。皆のアイドルって…誰？

「あれ？知らない？中央高校の初代のミスは晴香ちゃんなんだよ」

そんなの知らない。親父たちが入学の年に開校した位しか知らない。

「先生も1期生なんだよね」

「なんだ？その目は。俺はおじさんか？」

斉藤先生は俺の頭をぐりぐりする。痛い、痛いから。

「まあ、いいや。リョウ、恋つてのは案外近くにあるからな」

そついうと先生は職員玄関に吸い込まれていった。

案外近くにあるのが…恋。コンビニみたいなものか？

先生の一言が有難いというか、俺を余計に混乱させるだけだった。

初恋以前3（後書き）

両親の同級生だった斉藤先生登場です。

たまに高校生だった二人を暴露してくれるでしょう。

親と同じ高校に行っても…初恋は見つかりません（多分）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1744ba/>

僕らの恋模様 ~恋って何?~

2012年1月7日09時55分発行